

〔卒業論文〕

児童の歌唱における心理的要因についての研究

平成5年度卒業

兵庫教育大学学校教育学部教科・領域教育専修
芸術系専修コース（音楽）

89501G 池田千代
指導教官 鈴木 寛

この版はオリジナルをPDFに再構成したもので、オリジナルとはページレイアウト等が異なります。（責・鈴木）

	目次	頁
はじめに		3
引用文献		3
第一章 研究仮説の形成		4
第1節 基本調査		4
1． 小学校音楽科教育の実態について		4
2． 学校間差について		4
第2節 現代音楽教育における問題点		5
1． 音楽教育の目標		6
2． 現代音楽教育の歌唱における問題点		6
(1) 現代音楽教育の問題点		7
(2) 歌唱における問題点		7
第3節 仮説の形成		8
1． 第1仮説の形成		8
2． 第2仮説の形成		8
引用文献		8
第二章 調査		9
第1節 調査の目的		9
1． 調査の目的		9
2． 調査の仮説		9
第2節 調査の方法		10
1． 調査対象		10
2． 調査期間		10
3． 調査方法		10
4． 質問紙の回収状況		13
5． 分析方法		13
第3節 第1仮説の検証		14
引用文献		14
第三章 分析と考察		15
第1節 第2仮説の検証		15
1． 分析結果		15
2． 第2仮説		16
3． 第2仮説の検証		16
第2節 考察		22
1． 学校間差・学年差・学級差について		22
2． 因子について		33
第四章 まとめ		36
第1節 まとめ		36
引用文献		39
参考文献		39
おわりに		40

児童の歌唱における心理的要因についての研究

89501G 池田千代

指導教官 鈴木寛

はじめに

人が歌いたいと感じるときとは、一体どんなときなのだろうか。そして、そのときどんな歌を歌うのだろうか。歌だけでなく音楽は、人間の感情表現や自己表現の手段、人になにかを伝えようとするときに用いるコミュニケーションのひとつの手段として存在している。(注1)そして、人はそこに慰めと安らぎを求めするのである。

最近、歌わない子どもたちが増えている、といった話を見聞きする。(注2)これは、私の小学校高学年の頃にも実在していたし、過去9年間の「教育音楽(小学版)」に3度も特集が組まれているなどから、事実だといえるであろう。(注3)これはどういうことなのだろうか。学校音楽の基本的狙いは、音楽する喜びを発展させるための歌唱にあるといえる。歌唱こそは音楽活動の基礎であり、常に音楽教育の中核でなければならない。(注4)しかも歌う行為は、他の楽器を演奏することとは違って、専門の技術など必要ない。上手下手の区別なく、誰でも自由に親しむことができるのである。私が以前見学した、愛知県の梅園小学校の研究発表会では、授業のときも全校生徒による音楽集会のときも、すばらしい歌声を響かせ、私たち聴き手に深い感動を与えた。しかし、他方では高学年になると歌わない、という現場の教師の声を耳にする。何故、歌わない子どもたちが存在するのであるだろうか。もちろん、教師側から歌うように働きかければ、ある程度は歌うだろう。しかし、それは心から歌いたいと思って歌うのだろうか。歌わなければならない、という義務感だけでは、本当の歌う感動を得ることはほぼ不可能だといえるであろう。このようなことを踏まえ、子どもたちの歌唱における心理的要因について分析し、研究していきたい。

<引用文献>

(注1) 浅香淳編：小学校音楽教育講座第1巻「音楽と教育」、音楽之友社，1982 . p 94

(注2) 注1の書，p 95

(注3) 月刊「教育音楽」 小学版)，音楽之友社，1985 . 11，1987 . 11，1990 . 3

(注4) J . L . マーセル / M . グ・レーン：供田武嘉津訳：音楽教育心理学，音楽之友社，1965，p 234

第一章 研究仮説の形成

第1節 基本調査

1. 小学校音楽科教育の実態について

「将来何に役にたつのかと思うし、何のために音楽を勉強するのかわからない」、「音楽の授業は好きではないけど音楽は好き」、「楽譜が読めないから嫌いだ」、「音楽は、歌ったりするのが楽しい」(注1)など学校音楽についての子どもたちによる評価は様々である。しかし、学力や技術重視の風潮が濃い現在の教育において、子どもたちの教科教育としての音楽離れが進みつつあるといえるであろう。(注2) それには、実に多種多様な問題が数多く点在しているに違いない。

学校の音楽の授業内容のうち、高学年の子どもたちは、歌唱・リコーダーなどの楽器演奏・鑑賞に対して、項目・学年によって差はあるが、男子で少なくとも3割から6割(女子では6~7割)が好きと思っている、という報告がある。(図表1)(注3) またこれによると、作曲・楽典の学習・音楽史などの講話については、いずれも好きと回答した子どもが、多くても3割前後と低くなっている。加えて、学校の教育活動の中で好きなものに音楽を挙げる子どもが、男子では小学校5年生で約7割だったのが、中学3年生になると、1割未満に、女子でも約9割から6割にというように、学年が上がるにつれて確実に減少している。(図表2)(注4)

(図表1) Q11. 学校の音楽の授業のなかでどんなことをするのが好きですか。(単位%)

音楽行動	性別 / 学年	男 子		女 子		
		小5	小6	小5	小6	
歌をうたう	好き	27.5	40.7	**	70.7	67.3
	どちらでもない	58.8	42.4		25.0	27.9
	嫌い	12.7	16.1		4.3	4.8
リコーダーを吹く	好き	41.2	44.1	**	54.3	64.4
	どちらでもない	38.2	40.7		40.2	33.7
	嫌い	19.6	14.4		5.4	1.9
リコーダー以外の楽器を演奏する	好き	44.1	41.5	**	73.9	73.1
	どちらでもない	43.1	50.0		25.0	25.0
	嫌い	11.8	7.6		0.0	1.9
レコードなどで音楽をきく	好き	60.8	59.3		65.2	76.9
	どちらでもない	24.5	33.9		29.3	23.1
	嫌い	13.7	5.9		5.4	0.0
曲をつくる	好き	13.7	16.1	*	29.3	24.0
	どちらでもない	27.5	22.9		31.5	29.8
	嫌い	15.7	10.2		6.5	6.7
	したことがないのでわからない	42.2	50.0		31.5	39.4
楽譜や音符について勉強する	好き	6.9	9.3	**	26.1	30.8
	どちらでもない	46.1	45.8		50.0	50.0
	嫌い	37.3	35.6		17.4	13.5
	したことがないのでわからない	7.3	8.5		5.4	5.8
作曲家の話や音楽の歴史について勉強する	好き	10.8	24.6	**	17.4	26.0
	どちらでもない	41.2	33.9		48.9	51.9
	嫌い	22.5	16.1		18.5	9.6
	したことがないのでわからない	20.6	24.6		15.2	12.5
人数	(人)	102.0	118.0		92.0	104.0

**=1%水準で有意 * =5%水準で有意

出典：教育課程研究推進会編：「音楽科教育課程の現状と課題」、日本音楽教育学会1988

(図表2) Q8. 学校の勉強のなかで、あなたの好きだと思うものにつけてください。
(単位%)

性別・学年 教科等	男 子					女 子				
	小5	小6	中1	中2	中3	小5	小6	中1	中2	中3
1. 国語	31.7	29.9	19.5	20.0	26.0	32.6	48.1	19.0	30.0	42.7
2. 算数	48.5	48.7	38.9	37.4	41.0	37.0	32.7	35.7	26.4	21.8
3. 理科	61.4	56.4	15.0	22.6	31.0	43.5	36.5	23.8	7.3	17.3
4. 社会	29.7	71.8	48.7	43.5	43.0	21.7	42.3	33.3	35.5	24.5
5. 図工	62.4	56.4	35.4	24.3	23.0	67.4	60.0	40.5	21.8	23.6
6. 音楽	69.3	53.0	15.0	16.5	6.0	87.0	83.7	51.2	70.0	64.5
7. 家庭	59.4	53.0	11.5	7.0	8.0	95.7	86.5	38.1	27.3	40.0
8. 体育	84.2	80.3	69.9	63.5	34.0	73.9	62.5	53.6	40.0	44.5
9. 特活	42.6	45.3	30.1	27.0	27.0	48.9	55.8	51.2	25.5	40.0
10. 道徳	28.7	47.9	13.3	27.0	28.0	31.5	49.0	23.8	16.4	20.0
11. クラブ活動	88.1	88.9	61.1	55.7	42.0	92.4	93.3	59.3	44.5	52.7
回答者 ²⁾										
計(人)	101.0	117.0	113.0	115.0	100.0	92.0	104.0	84.0	110.0	110.0

1) はいずれかの項目につけた人数に対する比率(回答者比率)

2) はいずれかの項目につけた人数

出典: 同p 61より

2. 学校間差について

去る平成4年2月21日に、愛知県岡崎市立梅園小学校の音楽教育研究発表会に参加した。ここで、子どもたちの声の大きさだけでなく、ハーモニーの美しさ、加えて楽しそうな様子に驚かされると同時に、非常に感動させられた。公開授業(6年3組・主題名「美しいひびき」・中心教材「勇気一つを友にして」)のときもなかなか素晴らしかったが、その後の全校児童による音楽集会でも、歌うということはまさにこのことを指し示すのだと思えるほど素晴らしものだった。子どもたちは、体を伴奏に合わせて揺らしながら楽しそうに歌い、美しいハーモニーは体育館中に溢れそうになるほど響きわたり、つられて歌ってしまいそうだった。少なくとも、この梅園小学校では歌わない子どもはほとんど存在していないのではないかと思われた。

しかし、他校では「高学年になると歌わなくなる」という、現場の教師の声があちこちで聞かれる。(注5) またそれだけでなく、歌わない子どもたちへの取り組みに関する記事が、音楽の教育雑誌に何度も特集が組まれている。(注6) これらのことから、学校によって校風などが異なるように、子どもたちの歌唱状態も学校によって様々な差が生じていることがいえるだろう。

第2節 現代音楽教育の歌唱における問題点

1. 音楽教育の目標

音楽教育が何のために行われるかは、いうまでもなく、『教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。』（教育基本法、第一条）という一般教育の目標に参画するためである。そして、音楽独自の使命と役割とをもって、の目標達成に対する責任を分担するのである。^(注7) 音楽教育の目標について、近藤幹雄氏は「小学校音楽教育講座第1巻＝音楽と教育」^(注8) のなかで、次の4つにまとめている。

子どもの音楽性を高めること

『音楽性とは、一般的には音楽に関する感覚、技能、知的理解等を総括したものとされる。具体的には、表現及び鑑賞の活動ができる能力、つまり音楽的能力を意味している』^(注9) 豊かな＜情操＞や＜人間形成＞は、音楽教育を含む教育全般の結果の総計として予定されるものである。そして、音楽は、優れて人間的価値にかかわるものであり、それゆえに音楽は万人にとって貴重な宝である。音楽性を高める教育とは音楽的表現力の育成であり、それは感動的な音楽体験を通してしか身につかないものである。だから、音楽教育は、音楽的感動を子どもの心に体験させるべき使命を持つといわねばならない。音楽性を高めることによって、次への意欲を持つことが可能になるのである。

子どもの音楽的自発性を保護し育てること

音楽教育は、子どもの自発性をひとつの拠所としている。音楽教育は、子どもの音楽的自発性を重んじ、意図的な励ましや称賛することによって、より高い文化的価値を実現することができるのである。自発性の問題は、音楽的表現全般にわたる重要なファクターなのである。

子どもの自発的表現を、文化的価値を有するものに育てること

子どもの個人的な音楽的自発性に個人を超えた社会的客観的なものが受け入れられ、子どもの内面の可能性が表現として実現してはじめて、子どもにとっての音楽文化が成立するのである。音楽の基礎的な諸能力に支えられた音楽体験を通して、子どもは新しく高いものに高められるのである。

よい音楽の創造

音楽教育は、音楽の創造を目指すものであり、音楽の創造とは音を作り出すこと、つまり作曲と演奏を同時に含んでいることを意味する。質の高い演奏を聴き、感動することによって、その行為のすばらしさを感じさせられる。それは、優れた創造活動なのである。

音楽体験による感動を通して、子どもの音楽への愛は、取って付けた洗練でも趣味でもなく、真に血の通ったものになるのである。人間形成をめざす教育は、徳育・知育・体育・情操のすべてにわたって調和のとれた教育でなければならない。音楽教育の目標は、実は、この情操教育につながるものとしてとらえなければならない。

すなわち、音楽教育は、その教科の性格から、当然音楽性を培うことを直接的・中心的なねらいとするものであるが、ただそれだけにとどまらず、同時に、音楽を愛好する心情と高尚な美的情操を高め、創造的で個性豊かな人間性の育成を目指すものでなければならないのである。^(注10)

2. 現代の音楽教育の歌唱における問題点

(1) 現代の音楽教育の問題点

『音楽教育の目的は、真に満ち足りた生活を前進させることであり、音楽性の理解がその中心でなければならない。』(注11)とあるように、楽典や演奏上の技巧を学ぶことだけが音楽教育ではない。

そのことは、文部省の学習指導要領の音楽科の目標である、『表現及び鑑賞の活動を通して、音楽性の基礎を培うとともに、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養う。』(注12)と同様である。しかし、実際の学校現場ではどうであろうか。今までの音楽科では、演奏するにしても、ペーパーテストにしても、「できる」「できない」で評価されることが多かったように思われる。評価活動は、指導や学習という形態を成立させる上で、必要不可欠なものといえる。しかし、音楽科のような科目では、子どもの興味や欲求などの心情、感受性や表現能力など、数量で測定することは難しい。(注13) 前述のように「できる」「できない」で評価すれば、「できない」子どもは当然評価が低くなる。音楽科に限らず実技を伴う科目は、「できない」と評価され、そう思い込んでしまうと、急速にその科目への興味が醒める傾向があるため、個人の能力差を十分念頭に置き、その上で子どもの音楽性や興味・探求心などを質的にとらえるべきなのである。しかし、一人一人の子どもたちの音楽性を評価することは難しい。教師によって評価の観点は様々である。音楽科はとくに客観的基準を設定し難い科目であるし、だからといって歌・リコーダーなどの演奏や楽典の理解度などをテスト形式で、通知票や指導要録に記載する資料を得るためだけの目的で実施するようなことは、絶対に避けなければならない。

(2) 歌唱における問題点

音楽の授業で、歌唱の占める割合は大きい。それは極端な話、人間の声さえあれば可能であり、最も手っとり早く音楽を楽しむことができるというだけではない。歌うことによって得られる感動が、音楽を愛する心を育て、さらに高度な音楽への関心と意欲を持たせるのである。J. L. マーセルも『さまざまな種類の歌を、その表現的価値と詩的内容に重点をおいて歌うことによって、音楽についての意識が発達する。』(注14)といているように、歌唱は音楽教育のなかで欠くことのできない存在なのである。

「もっと大きな声で歌いなさい」などと教師から指導されることは、誰にでも記憶にあることだと思われる。しかし、そのような働きかけでは、「歌いたい」という気にはなれない。それどころか、歌わなければならないという義務感だけが生まれ、歌うことが苦痛になり、意欲を失わせてしまう。例えばそのような指導で、子どもが歌ったとしても、結果的には教師の自己満足に終わってしまうし、歌わない子どもをつくってしまう一因となるのではないか。歌うのは子どもたち自身であるということを、忘れてはいけない。また、最初から音符がどうか、こんな風に歌えとか指導せず、まず楽しい音楽活動を子どもたちに体験させることも大切だといえる。(注15)

第3節 仮説の形成

1. 第1仮説の形成

普段、私たちが何らかの行動をするときには、いろいろな理由や原因が存在しているはずである。それと同じことが、歌唱に関しても当てはまるのではないだろうか。歌うにしても歌わないにしても、何らかの理由や原因が存在し、それが一種の刺激となり行動という形になって現れると考えられる。(注16)つまり歌わないというのは、「歌わない」という行動を起こさせる理由、あるいは原因が存在し、それが作用した結果であるといえないだろうか。このような疑問から、以下の仮説を形成した。

第1仮説

歌わない子どもに原因が存在する

2. 第2仮説の形成

歌わないのは子どもたちであるが、子どもたちだけに歌わない原因があるとはいえない。なぜなら、実際に歌うように働きかけるのは教師側だからである。子どもたちは、教師によって影響を受けやすいことも事実である。それに加えて、授業は子ども・教師・教材の3つの要素から成り立っていることから、教材にも子どもたちの音楽の授業に対する考えや態度・姿勢などを左右させる要素があるといえる。

子どもたちが歌わないのは、歌えないのではなくて、歌わない原因となる要素が存在しているとも考えられる。そして、その要素が歌うという行為を左右しているのではないだろうか。では、その要素を発見し、取り除くことができるのなら、歌わない子どもを歌う子どもに変えることはできないだろうか。そこで、第1仮説に対し、次の第2仮説を形成した。

第2仮説

歌わない原因となる要素を取り除けば歌うようになるだろう

これら2つの仮説をもとに調査を行い、研究を進めていきたい。

<引用文献>

(注1) 季刊「音楽教育研究」, 音楽之友社, 1987・4, p. 9・12・13・15

(注2) 教育課程研究推進委員会編:「音楽科教育課程研究の現状と課題」, 日本音楽教育学会, 1988, p. 5867

(注3) 注2の書, p.62

(注4) 注2の書, p.61

(注5) 注2の書, p. 70・71

(注6) 季刊「音楽教育研究」, 音楽之友社, 1984・夏, p. 81

月刊「音楽教育」(小学版), 音楽之友社, 1985・11p. 40 / 1987・11 p.40 / 1990・3p. 36

(注7) 真篠将先生退官記念著作集編集委員会編:真篠将音楽教育を語る, 音楽之友社, 1986, p. 22

(注8) 浅香淳編:小学校音楽教育講座第1巻音楽と教育, 音楽之友社, 1982・p. 41~44

(注9) 文部省:小学校指導書(音楽編), 教育芸術社, 1989, p. 5

(注10) 注7の書, p. 23

(注11) J. L. マーセル/M. グレーン: 供田武嘉津訳, 音楽教育心理学, 音楽之友社, 1965, p. 312

(注12) 文部省, 小学校学習指導要領(音楽編), 1989

(注13) 木本治子/柳生力編:教育大学教科教育講座 10「音楽科教育の理論と展開」, 第一法規, 1980, p. 174~176

(注14) J. L. マーセル: 美田節子訳, 音楽的成長のための教育, 音楽之友社, 1971, p. 316

(注15) 東京教育大学附属小学校初等教育研究会編:音楽科教育における現代的課題, 泰流社, 1977, p. 53

(注16) 小山章三: 合唱と教育と一音楽教師の手記, 音楽之友社, 1982・p. 79

第二章 調査

第1節 調査の目的

1. 調査の目的

学校の音楽の授業の中で、歌わない子どもが存在している、ということは今まで述べてきた。しかし、歌わないのは学校生活の中だけなのだろうか。子どもたちの日常生活の中で、歌はどんな存在で、どんなときに、どんな歌を、何を思いながら歌うのか、それとも忘れられた存在なのだろうか。

音楽は、人々の生活の中から生まれ、そこから発展してきた。(注1)そして、歌は感情表現の手段の一つとして人々を精神的に支えてきたのだといえる。だからこそ、ことばにできない思いを歌に託して歌えば、そこから何らかの感動や安らぎが得られ、より一層豊かな生活が送れるはずである。事実、『私たちの日常生活の中には、音楽を伴わせることによって、行動が円滑に進行し、情緒の安定する場合が多くある。』(注2)のである。子どもたちが歌わないというのは、歌いたくなくさせる要素が存在しているからなのではないか、という疑問は以前にも述べた。もしそうであるのならば、その要素を取り除けば、歌を歌うようになるとは考えられないだろうか。そこで、歌わない原因を探り、その要素を明確にし、積極的に歌える子どもを育てるのに役立てていきたい。

2. 研究仮説

第1仮説

歌わない子どもに原因が存在する

第2仮説

歌わない原因となる要素を取り除けば歌うようになるだろう。

第2節 調査の方法

1. 調査対象

北海道旭川市立富沢小学校

4年生 1組9名（男4名，女5名）

5年生 1組7名（男4名，女3名）

6年生 1組8名（男5名，女3名）

兵庫県三木市立緑ヶ丘小学校

4年生 1組28名（男14名，女14名）

2組29名（男15名，女14名）

5年生 1組30名（男15名，女15名）

2組29名（男14名，女15名）

6年生 1組32名（男18名，女14名）

3組33名（男18名，女15名）

兵庫県加古川市立鳩里小学校

6年生 2組35名（男15名，女20名）

鹿児島県大口市立大口小学校

4年生 2組36名（男19名，女17名）

3組37名（男20名，女17名）

5年生 1組36名（男17名，女19名）

2組32名（男17名，女15名）

3組30名（男16名，女14名）

6年生 1組37名（男16名，女21名）

3組38名（男18名，女20名）

計 486名（男 245名 女 241名）

調査は、恥じらいが大きく影響しているのではないかと考えられること、また年齢的に第二次性徴の初期段階（あるいはその準備段階）であることなどから、対象学年を4年生から6年生に設定して行なった。

また、この調査は子どもたちの歌唱の状態を把握し、分析するためのものであるため、あらゆる差を含めた小学校全体として考えた。

学校間などで顕著な差が見られた場合は、それについても考察したい。

2. 調査期間

北海道旭川市立富沢小学校1992年10月14日～24日

兵庫県三木市立緑ヶ丘小学校1992年10月12日～24日

兵庫県加古川市立鳩里小学校1992年10月13日～24日

鹿児島県大口市立大口小学校1992年10月12日～11月21日

3. 調査方法

音楽の授業を含む学校生活及び日常生活のなかで見られる子どもたちの歌唱に関する活動を、領域別にいくつかに分類し、それをもとに次の44の調査項目を設定した。調査は質問紙形式で行い、回答方法は双極の5段階評定法を用いた。

<アンケート>

あなたは、どんなときにどのくらい歌いたと思いますか？

たとえば・・・

友だちといっしょにいるときに歌いたいと

とても思うなら	5	ぜ				
		ん	あ	ど		
すこし思うなら	4	ぜ	ま	ち		
		ん	り	ら	す	と
どちらでもないなら	3	思	思	で	こ	て
		わ	わ	も	し	も
あまり思わないなら	2	な	な	な	思	思
		い	い	い	う	う
ぜんぜん思わないなら	1	1	2	3	4	5
に						
をつけます。						

自分の気持ちと同じだと思うところに一つだけ をつけて、後でマークカードにマーク
しましょう。

では始めましょう

1. 音楽のじゆぎょうのときに歌いたい	1	2	3	4	5
2. 学校のぎょう事のときに歌いたい	1	2	3	4	5
3. 休み時間のときに歌いたい	1	2	3	4	5
4. 学校の行き、帰りに歌いたい	1	2	3	4	5
5. 遊んでいるときに歌いたい	1	2	3	4	5
6. 周りの人といっしょに歌いたい	1	2	3	4	5
7. 一人にいるときに歌いたい	1	2	3	4	5
8. おふろに入っているときに歌いたい	1	2	3	4	5
9. たいくつなときに歌いたい	1	2	3	4	5
10. 知っている曲が流れているときに歌いたい	1	2	3	4	5
11. 気持ちがうきうきしているときに歌いたい	1	2	3	4	5
12. 気持ちがしずんでいるときに歌いたい	1	2	3	4	5
13. 音楽のじゆぎょうで習った歌を歌いたい	1	2	3	4	5
14. 給食やそうじの時間に流れる歌を歌いたい	1	2	3	4	5
15. 小さいころによく聞かされた歌を歌いたい	1	2	3	4	5
16. 元気が出る歌を歌いたい	1	2	3	4	5
17. メロディーがすきな歌を歌いたい	1	2	3	4	5
18. 歌しがすきな歌を歌いたい	1	2	3	4	5
19. テレビなどでよく聞く歌を歌いたい	1	2	3	4	5
20. すきな歌手が歌っている歌を歌いたい	1	2	3	4	5
21. 友だちどうしではやっている歌を歌いたい	1	2	3	4	5

22. 歌しのない、器楽曲を歌いたい	1	2	3	4	5
23. みんなで合唱するときに歌いたい	1	2	3	4	5
24. みんなで同じメロディーを歌いたい	1	2	3	4	5
25. 何人かでみんなちがうメロディーを歌いたい	1	2	3	4	5
26. 一人でみんなの前で歌いたい	1	2	3	4	5
27. 発表会やえんそう会で歌いたい	1	2	3	4	5
28. ばんそうを付けて歌いたい	1	2	3	4	5
29. ばんそうを付けないで歌いたい	1	2	3	4	5
30. 楽しいから歌いたい	1	2	3	4	5
31. じょうずに歌いたい	1	2	3	4	5
32. 曲をおぼえ、歌えるようになりたい	1	2	3	4	5
33. 歌うことがすきだから歌いたい	1	2	3	4	5
34. 歌わないと、しかられたり何回も歌わされたくない	1	2	3	4	5
35. みんなが歌っているから歌おうと思う	1	2	3	4	5
36. 歌うとき、きれいな声を出そうと思う	1	2	3	4	5
37. 歌うとき、しせいに気をつけようと思う	1	2	3	4	5
38. 歌うとき、はっきり発音しようと思う	1	2	3	4	5
39. なっとくがいくまで何回も歌いたい	1	2	3	4	5
40. かってにメロディーをつくって歌いたい	1	2	3	4	5
41. 歌しを自分でかえて歌いたい	1	2	3	4	5
42. 人が歌っているときに他のパートを付けて歌いたい	1	2	3	4	5
43. 自分から進んで歌いたい	1	2	3	4	5
44. 歌うときは、はずかしくない	1	2	3	4	5

項目内容は、以下の7分野に絞って設定した。

TPO に関するもの

どんなときに、どんな場所で、どんな場合のときに、歌いたいかどうかについて

歌唱内容

どんな歌を歌うのかについて

形態

独唱・重唱・合唱・伴奏の有無

歌唱の理由

なぜ歌うのかについて

歌唱に対する態度・姿勢

どんなことを考えながら歌うのかについて

創造性

そのまま歌うのか、歌詞やメロディーを換えて歌うのかについて

自主性

自主的に歌えるかどうかについて

4．質問紙の回収状況

回収率70.9%（回収部数485部 / 回収予定部数685部）

有効回答率100%（有効回答部数485部 / 回収部数485部）

5．分析手法

評定値に基づき、因子分析（factor analysis）を行った。因子分析とは、測定された数種類のデータをなるべく少数の特定値で表現しようとするもの、つまり諸変数に含まれる心的要因を、より少数の基本的な因子で説明するための統計的手法である。^{（注3）} 因子を抽出する方法には、主成分法・セントロイド法・主軸法などがあるが、ここでは比較的最近に提唱された方法である最尤法による分析を行った。

また、因子を抽出する手続きに加えて、因子軸の回転を行うことによって因子の解釈を容易にすることができる。回転法には、直交軸回転と斜交軸回転があるが、ここではバリマックス法による直交軸回転を行うことによって、因子の解釈を容易にできた。^{（注4）}

因子分析と因子負荷行列の演算手続きは、非常に複雑であるため、コンピューターを利用しなければならない。今回の分析については、NEC-PC98により、すべての演算を行った。

第3節 第1仮説の検証

いままで述べてきたように、一般的に人が行動を起こすときは、その行動を起こすきっかけとなる何かがある。それは、直接的であれ間接的であれ、日常生活の上でのほんの些細な動作に対しても同じようにいえるはずである。意識するかしないかは、個人差やそのときの状況などが大きく働いているため、細かい動作や習慣的な行動について、いちいちその理由を考えたり確認したりしない。しかし、心理的なものが作用するとなると、それが原因となっていることを意識して行動するに違いない。

このように考えていくと、子どもたちの歌唱行為も心理的な作用を多く受けている、とはいえないだろうか。すると、歌う・歌わないという基本的な行為にも大きく影響してくる。

従って第1仮説である、歌わない子どもに原因が存在するは、正しいといえる。

<引用文献>

- (注1) 浅香淳編：小学校音楽教育講座第1巻音楽と教育，音楽之友社，1982，p.8～9
- (注2) 梅本堯夫：音楽心理学，誠信書房，1966，p. 495
- (注3) 小林利宣編：教育臨床心理学事典（増補版），北大路書房，1980，p. 25
- (注4) (株)日本能率協会総合研究所：多変量解析パッケージマニュアル，p. 14

第三章 分析 と 考察

第 1 節 第 2 仮説の検証

1 . 分析結果

(図表3) 歌唱に関するアンケート 基本統計量

	平均	分散	標準偏差	最小値	最大値
Q.01	3.6379	1.5469	1.2438	1.0000	5.0000
Q.02	2.8004	1.4178	1.1907	1.0000	5.0000
Q.03	2.0597	1.3676	1.1694	1.0000	5.0000
Q.04	2.1296	1.6512	1.2850	1.0000	5.0000
Q.05	2.2510	1.6853	1.2982	1.0000	5.0000
Q.06	2.9383	1.8766	1.3699	1.0000	5.0000
Q.07	2.6564	2.1147	1.4542	1.0000	5.0000
Q.08	2.8889	2.2103	1.4867	1.0000	5.0000
Q.09	3.1584	2.0635	1.4365	1.0000	5.0000
Q.10	3.7716	1.8756	1.3695	1.0000	5.0000
Q.11	3.4938	1.9165	1.3844	1.0000	5.0000
Q.12	2.0844	1.4300	1.1958	1.0000	5.0000
Q.13	2.9465	1.9477	1.3956	1.0000	5.0000
Q.14	2.0658	1.3771	1.1735	1.0000	5.0000
Q.15	2.3642	1.5516	1.2456	1.0000	5.0000
Q.16	3.4609	1.9026	1.3793	1.0000	5.0000
Q.17	3.6235	1.9548	1.3982	1.0000	5.0000
Q.18	3.5062	1.9165	1.3844	1.0000	5.0000
Q.19	3.7222	1.7804	1.3343	1.0000	5.0000
Q.20	3.2531	2.0905	1.4458	1.0000	5.0000
Q.21	3.4589	1.9519	1.3971	1.0000	5.0000
Q.22	2.4753	1.8788	1.3707	1.0000	5.0000
Q.23	3.0370	1.9574	1.3991	1.0000	5.0000
Q.24	3.1091	1.7427	1.3201	1.0000	5.0000
Q.25	2.5967	1.9566	1.3988	1.0000	5.0000
Q.26	1.6379	1.2335	1.1107	1.0000	5.0000
Q.27	2.5247	1.9200	1.3856	1.0000	5.0000
Q.28	3.3004	2.0910	1.4460	1.0000	5.0000
Q.29	2.3992	1.6135	1.2703	1.0000	5.0000
Q.30	3.4383	1.9003	1.3785	1.0000	5.0000
Q.31	3.7305	1.7272	1.3142	1.0000	5.0000
Q.32	3.9074	1.8244	1.3507	1.0000	5.0000
Q.33	3.2263	2.1342	1.4609	1.0000	5.0000
Q.34	3.6584	2.2295	1.4932	1.0000	5.0000
Q.35	3.0021	1.5526	1.2460	1.0000	5.0000
Q.36	3.6667	1.8021	1.3424	1.0000	5.0000
Q.37	3.2716	1.6498	1.2844	1.0000	5.0000
Q.38	3.5350	1.8493	1.3599	1.0000	5.0000
Q.39	2.6728	1.9608	1.4003	1.0000	5.0000
Q.40	2.7181	2.1327	1.4604	1.0000	5.0000
Q.41	2.9835	2.2678	1.5059	1.0000	5.0000
Q.42	2.5947	1.7838	1.3356	1.0000	5.0000
Q.43	2.5761	1.9189	1.3853	1.0000	5.0000
Q.44	2.9239	1.9550	1.3982	1.0000	5.0000

2．第2仮説

歌わない原因となる要素を取り除けば歌うようになるであろう

3．第2仮説の検証

いままでの調査及び分析の結果、歌唱を左右する原因となる要素をいくつか発見することができた。それぞれの要素について検証していきたい。

習慣性

習慣とは、一般的には、経験によって後天的に形成された、比較的固定した反応形式のことである。^(注1) 先天的なものでないため、歌唱に対する習慣・態度は、歌唱に有効な方向へ改善可能だといえる。

リラックス（解放）

楽的に見ても、精神的・肉体的にある程度リラックスして歌唱することは、効果的である。また、緊張しているときに歌おうと思わないことから、リラックスすることは、歌唱行為に対してプラス作用があるといえる。

集団行動（同調）

集団の特質の中で、同調行動（conformity）がある。これは、集団生活で集団規範あるいは多数意見に従わせるような集団圧力が働き、集団成員がとる斉一的な行動様式のことである。^(注2) この集団の特質を上手く利用できれば、子どもたちを歌いたいという気持ちに盛り上げることが可能であるが、その反対の効果をもたらすこともあるために、慎重に対処する必要がある。

自発性

教育を行う上で、自発性は非常に重要である。これを育てることは、教師の使命であり、教育の目的でもある。

向上

歌唱をより高尚なものへと高めるためには、この向上心を持たせることも大切である。感動的な音楽体験は、子どもたちに興味・関心を持たせると同時に、向上心の保持に効果的である。

欲求抑止

欲求（need）とは、行動を解発させる要因として、個体内に仮定された構成概念である。^(注3) その欲求を抑制する機能と、合わせ持っている。歌いたい、と思っても、その欲求を抑制する様々な障害が生じることがある。それを取り除くことによって、初めて心から歌えるのである。

以上のように、調査及び分析によって明確にされたこれらの要素は、歌唱に対してマイナス方向に向かわせるように働いていた。しかし、逆に作用すれば、積極的に歌える子どもを育てる上で、かなり重要なポイントとなり得ると思われる。要するにこれらの要素は、歌わない原因となる要素であると同時に、歌う原因となる要素でもあるのである。しかし、人間に対する教育は、機械とは異なっているため、悪化させる原因となるものを取り除いたからといって、すぐに効果がでたり良くなったりするとは断言できない。それでも、原因を見つけだし、子どもに愛情と時間をかければ、ある程度は教育的効果が期待できるものと考えられる。ゆえに、第2仮説である、歌わない原因となる要素を取り除けば歌うようになるであろうは、その意味では正しいといえる。

	平均	分散	標準偏差	最小値	最大値
Q.01	3.2500	1.1522	1.0734	1.0000	5.0000
Q.02	2.7083	1.3460	1.1602	1.0000	5.0000
Q.03	1.8750	0.8967	0.9470	1.0000	5.0000
Q.04	1.8333	0.9275	0.9631	1.0000	5.0000
Q.05	2.0000	0.8696	0.9325	1.0000	5.0000
Q.06	2.5000	1.3913	1.1795	1.0000	5.0000
Q.07	2.6250	1.8967	1.3772	1.0000	5.0000
Q.08	2.3333	1.1015	1.0495	1.0000	5.0000
Q.09	3.0833	1.3841	1.1765	1.0000	5.0000
Q.10	3.5417	1.4765	1.2151	1.0000	5.0000
Q.11	3.2500	1.4130	1.1887	1.0000	5.0000
Q.12	2.0417	0.8243	0.9079	1.0000	5.0000
Q.13	2.9167	1.4710	1.2129	1.0000	5.0000
Q.14	2.1250	1.2446	1.1156	1.0000	5.0000
Q.15	2.0833	1.2101	1.1001	1.0000	5.0000
Q.16	3.2500	1.4130	1.1887	1.0000	5.0000
Q.17	3.2083	2.1721	1.4738	1.0000	5.0000
Q.18	3.4167	1.9058	1.3805	1.0000	5.0000
Q.19	3.5000	1.6522	1.2854	1.0000	5.0000
Q.20	3.1250	1.9402	1.3929	1.0000	5.0000
Q.21	3.2500	1.5870	1.2597	1.0000	5.0000
Q.22	2.5417	1.7373	1.3181	1.0000	5.0000
Q.23	2.8333	1.8841	1.3726	1.0000	5.0000
Q.24	3.1667	1.9710	1.4039	1.0000	5.0000
Q.25	2.4167	1.5580	1.2482	1.0000	5.0000
Q.26	1.3750	0.4185	0.6469	1.0000	5.0000
Q.27	2.3750	2.0707	1.4390	1.0000	5.0000
Q.28	2.5833	2.4275	1.5581	1.0000	5.0000
Q.29	2.3333	1.7971	1.3406	1.0000	5.0000
Q.30	3.0000	1.7391	1.3188	1.0000	5.0000
Q.31	3.3333	1.3623	1.1672	1.0000	5.0000
Q.32	3.6250	1.7228	1.3126	1.0000	5.0000
Q.33	2.7500	2.0217	1.4219	1.0000	5.0000
Q.34	2.7083	2.4765	1.5737	1.0000	5.0000
Q.35	2.6250	1.3750	1.1726	1.0000	5.0000
Q.36	3.0833	1.4710	1.2129	1.0000	5.0000
Q.37	2.6250	0.9402	0.9696	1.0000	5.0000
Q.38	3.1667	1.6232	1.2740	1.0000	5.0000
Q.39	2.7083	1.6069	1.2676	1.0000	5.0000
Q.40	2.4167	1.5580	1.2482	1.0000	5.0000
Q.41	2.5000	1.4783	1.2158	1.0000	5.0000
Q.42	2.5000	1.1304	1.0632	1.0000	5.0000
Q.43	2.2917	1.6938	1.3015	1.0000	5.0000
Q.44	3.0417	1.6938	1.3015	1.0000	5.0000

(図表5) 歌唱に関するアンケート加古川市立鳩里小学校6 2基本統計量

	平均	分散	標準偏差	最小値	最大値
Q.01	2.9143	1.3748	1.1725	1.0000	5.0000
Q.02	2.2571	0.9025	0.9500	1.0000	5.0000
Q.03	2.1714	1.2050	1.0977	1.0000	5.0000
Q.04	2.6000	1.8941	1.3763	1.0000	5.0000
Q.05	2.9429	2.4084	1.5519	1.0000	5.0000
Q.06	3.1143	1.9277	1.3884	1.0000	5.0000
Q.07	2.9714	2.2639	1.5046	1.0000	5.0000
Q.08	3.2000	2.2824	1.5108	1.0000	5.0000
Q.09	3.0857	2.6689	1.6337	1.0000	5.0000
Q.10	3.7429	2.2555	1.5018	1.0000	5.0000
Q.11	3.3143	2.2807	1.5102	1.0000	5.0000
Q.12	2.2571	1.9613	1.4005	1.0000	5.0000
Q.13	2.5143	1.9042	1.3799	1.0000	5.0000
Q.14	1.8571	1.0672	1.0331	1.0000	5.0000
Q.15	2.0857	1.0219	1.0109	1.0000	5.0000
Q.16	3.5714	2.0756	1.4407	1.0000	5.0000
Q.17	4.1429	1.5966	1.2636	1.0000	5.0000
Q.18	3.8286	2.1462	1.4650	1.0000	5.0000
Q.19	3.8571	1.4790	1.2161	1.0000	5.0000
Q.20	3.2571	2.0790	1.4419	1.0000	5.0000
Q.21	3.2000	1.9294	1.3890	1.0000	5.0000
Q.22	2.2857	1.7983	1.3410	1.0000	5.0000
Q.23	2.4857	1.5513	1.2455	1.0000	5.0000
Q.24	2.6857	1.7513	1.3234	1.0000	5.0000
Q.25	2.3143	2.1630	1.4707	1.0000	5.0000
Q.26	1.5143	0.7866	0.8869	1.0000	5.0000
Q.27	2.4286	2.0168	1.4201	1.0000	5.0000
Q.28	3.1429	2.8319	1.6828	1.0000	5.0000
Q.29	2.3143	1.6924	1.3009	1.0000	5.0000
Q.30	3.4857	2.1395	1.4627	1.0000	5.0000
Q.31	3.8286	2.0286	1.4243	1.0000	5.0000
Q.32	3.9429	1.9966	1.4130	1.0000	5.0000
Q.33	3.2571	2.1966	1.4821	1.0000	5.0000
Q.34	4.0286	2.2050	1.4849	1.0000	5.0000
Q.35	3.2000	1.7529	1.3240	1.0000	5.0000
Q.36	3.3143	1.6336	1.2781	1.0000	5.0000
Q.37	2.7714	1.4756	1.2148	1.0000	5.0000
Q.38	3.5429	1.7849	1.3360	1.0000	5.0000
Q.39	2.3714	2.1227	1.4570	1.0000	5.0000
Q.40	2.6857	2.4571	1.5675	1.0000	5.0000
Q.41	3.3714	2.7698	1.6643	1.0000	5.0000
Q.42	2.2486	2.1345	1.4610	1.0000	5.0000
Q.43	2.0000	1.4118	1.1882	1.0000	5.0000
Q.44	2.1143	1.8101	1.3454	1.0000	5.0000

(図表6) 歌唱に関するアンケート (4年生, 130人) 基本統計量

	平均	分散	標準偏差	最小値	最大値
Q.01	3.9923	1.2325	1.1102	1.0000	5.0000
Q.02	2.8692	1.2463	1.1164	1.0000	5.0000
Q.03	1.9462	1.1366	1.0661	1.0000	5.0000
Q.04	1.9615	1.4326	1.1969	1.0000	5.0000
Q.05	1.8077	1.1488	1.0718	1.0000	5.0000
Q.06	2.7077	1.7434	1.3204	1.0000	5.0000
Q.07	2.5539	2.1560	1.4683	1.0000	5.0000
Q.08	2.7000	1.9326	1.3902	1.0000	5.0000
Q.09	3.0385	2.1458	1.4694	1.0000	5.0000
Q.10	3.7539	2.0320	1.4255	1.0000	5.0000
Q.11	3.2769	1.9979	1.4135	1.0000	5.0000
Q.12	1.9000	1.4240	1.1933	1.0000	5.0000
Q.13	3.5231	1.8638	1.3652	1.0000	5.0000
Q.14	2.1308	1.6184	1.2722	1.0000	5.0000
Q.15	2.4231	1.7964	1.3403	1.0000	5.0000
Q.16	3.5308	2.0339	1.4262	1.0000	5.0000
Q.17	3.5923	2.0108	1.4180	1.0000	5.0000
Q.18	3.3846	1.9129	1.3831	1.0000	5.0000
Q.19	3.3462	1.9645	1.4016	1.0000	5.0000
Q.20	2.7462	2.2994	1.5164	1.0000	5.0000
Q.21	3.2615	2.2101	1.4867	1.0000	5.0000
Q.22	2.4692	1.7394	1.3189	1.0000	5.0000
Q.23	3.1308	1.8820	1.3719	1.0000	5.0000
Q.24	3.2462	1.6599	1.2884	1.0000	5.0000
Q.25	2.4923	1.8953	1.3767	1.0000	5.0000
Q.26	1.7077	1.3248	1.1510	1.0000	5.0000
Q.27	2.5380	1.7239	1.3130	1.0000	5.0000
Q.28	3.3077	1.7030	1.3050	1.0000	5.0000
Q.29	2.4462	1.7529	1.3240	1.0000	5.0000
Q.30	3.3154	1.8610	1.3642	1.0000	5.0000
Q.31	3.8846	1.5137	1.2303	1.0000	5.0000
Q.32	3.9231	1.8855	1.3731	1.0000	5.0000
Q.33	3.1692	1.9556	1.3984	1.0000	5.0000
Q.34	3.4923	2.2364	1.4955	1.0000	5.0000
Q.35	3.0692	1.5688	1.2525	1.0000	5.0000
Q.36	3.9231	1.4824	1.2175	1.0000	5.0000
Q.37	3.4923	1.5542	1.2467	1.0000	5.0000
Q.38	3.7462	1.6948	1.3018	1.0000	5.0000
Q.39	2.5769	1.8429	1.3575	1.0000	5.0000
Q.40	2.5769	2.2770	1.5090	1.0000	5.0000
Q.41	2.8308	2.4518	1.5658	1.0000	5.0000
Q.42	2.5308	1.8014	1.3422	1.0000	5.0000
Q.43	2.6539	2.0420	1.4260	1.0000	5.0000
Q.44	3.0308	2.1851	1.4742	1.0000	5.0000

図表7) 歌唱に関するアンケート (5年生, 157人) 基本統計量

	平均	分散	標準偏差	最小値	最大値
Q.01	3.6624	1.6866	1.2689	1.0000	5.0000
Q.02	2.8854	1.7047	1.3057	1.0000	5.0000
Q.03	2.1783	1.4808	1.2169	1.0000	5.0000
Q.04	2.1847	1.6644	1.2901	1.0000	5.0000
Q.05	2.3631	1.8353	1.3547	1.0000	5.0000
Q.06	3.0764	1.8787	1.3707	1.0000	5.0000
Q.07	2.6561	2.1245	1.4576	1.0000	5.0000
Q.08	3.0701	2.4758	1.5735	1.0000	5.0000
Q.09	3.2612	2.0532	1.4329	1.0000	5.0000
Q.10	3.1908	1.8253	1.3511	1.0000	5.0000
Q.11	3.5860	1.8980	1.3777	1.0000	5.0000
Q.12	2.3503	1.5111	1.2293	1.0000	5.0000
Q.13	2.8471	1.9637	1.4013	1.0000	5.0000
Q.14	2.2357	1.5146	1.2307	1.0000	5.0000
Q.15	2.3758	1.6592	1.2881	1.0000	5.0000
Q.16	3.5414	1.7883	1.3373	1.0000	5.0000
Q.17	3.6688	1.9537	1.3978	1.0000	5.0000
Q.18	3.5350	1.8529	1.3629	1.0000	5.0000
Q.19	3.9236	1.7377	1.3182	1.0000	5.0000
Q.20	3.5733	1.7462	1.3214	1.0000	5.0000
Q.21	3.7717	1.6487	1.2840	1.0000	5.0000
Q.22	2.6561	2.2015	1.4837	1.0000	5.0000
Q.23	3.0127	2.0896	1.4455	1.0000	5.0000
Q.24	3.0828	1.8457	1.3586	1.0000	5.0000
Q.25	2.7580	2.1462	1.4650	1.0000	5.0000
Q.26	1.7643	1.4890	1.2202	1.0000	5.0000
Q.27	2.5350	2.0581	1.4346	1.0000	5.0000
Q.28	3.3949	2.1123	1.4534	1.0000	5.0000
Q.29	2.5605	1.6966	1.3026	1.0000	5.0000
Q.30	3.4905	2.0464	1.4305	1.0000	5.0000
Q.31	3.7006	1.8649	1.3656	1.0000	5.0000
Q.32	3.8344	1.8570	1.3627	1.0000	5.0000
Q.33	3.3376	2.2892	1.5130	1.0000	5.0000
Q.34	3.7006	2.1342	1.4609	1.0000	5.0000
Q.35	2.9427	1.7980	1.3409	1.0000	5.0000
Q.36	3.5350	1.9683	1.4030	1.0000	5.0000
Q.37	3.4841	1.7001	1.3039	1.0000	5.0000
Q.38	3.5032	2.0080	1.4170	1.0000	5.0000
Q.39	2.8726	2.0734	1.4399	1.0000	5.0000
Q.40	2.9299	2.2579	1.5026	1.0000	5.0000
Q.41	3.1656	2.0621	1.4360	1.0000	5.0000
Q.42	2.7389	1.8993	1.3782	1.0000	5.0000
Q.43	2.6815	1.9749	1.0453	1.0000	5.0000
Q.44	3.0382	1.9473	1.3954	1.0000	5.0000

(図表8) 歌唱に関するアンケート (6年生, 175人) 基本統計量

	平均	分散	標準偏差	最小値	最大値
Q.01	3.4286	1.5452	1.2430	1.0000	5.0000
Q.02	2.6857	1.2972	1.1390	1.0000	5.0000
Q.03	2.0629	1.4960	1.2231	1.0000	5.0000
Q.04	2.2457	1.8761	1.3697	1.0000	5.0000
Q.05	2.5086	1.8941	1.3598	1.0000	5.0000
Q.06	3.0514	1.9801	1.4072	1.0000	5.0000
Q.07	2.7314	2.1286	1.4590	1.0000	5.0000
Q.08	2.9371	2.2661	1.5054	1.0000	5.0000
Q.09	3.1714	2.1199	1.4560	1.0000	5.0000
Q.10	3.7029	1.8652	1.3657	1.0000	5.0000
Q.11	3.3886	1.9401	1.3929	1.0000	5.0000
Q.12	1.9829	1.3618	1.1670	1.0000	5.0000
Q.13	2.6114	1.7217	1.3121	1.0000	5.0000
Q.14	1.8571	1.0427	1.0211	1.0000	5.0000
Q.15	2.3429	1.3301	1.1533	1.0000	5.0000
Q.16	3.3714	1.9819	1.4078	1.0000	5.0000
Q.17	3.6686	1.8895	1.3746	1.0000	5.0000
Q.18	3.5829	1.9917	1.4113	1.0000	5.0000
Q.19	3.8629	1.5673	1.2519	1.0000	5.0000
Q.20	3.3657	2.0034	1.4154	1.0000	5.0000
Q.21	3.3600	1.9904	1.4108	1.0000	5.0000
Q.22	2.3143	1.6995	1.3037	1.0000	5.0000
Q.23	3.0171	1.9250	1.3874	1.0000	5.0000
Q.24	3.0229	1.6891	1.2997	1.0000	5.0000
Q.25	2.5486	1.8813	1.3716	1.0000	5.0000
Q.26	1.5029	1.0101	1.0050	1.0000	5.0000
Q.27	2.5257	1.9519	1.3971	1.0000	5.0000
Q.28	3.3029	2.2583	1.5028	1.0000	5.0000
Q.29	2.2286	1.3842	1.1765	1.0000	5.0000
Q.30	3.5468	1.8008	1.3419	1.0000	5.0000
Q.31	3.7086	1.8054	1.3437	1.0000	5.0000
Q.32	3.9886	1.6321	1.2775	1.0000	5.0000
Q.33	3.2400	2.1375	1.4620	1.0000	5.0000
Q.34	3.8457	1.9933	1.4118	1.0000	5.0000
Q.35	3.0571	1.3415	1.1583	1.0000	5.0000
Q.36	3.6343	1.7276	1.3144	1.0000	5.0000
Q.37	3.0114	1.5976	1.2640	1.0000	5.0000
Q.38	3.4629	1.8248	1.3508	1.0000	5.0000
Q.39	2.5600	1.9720	1.4043	1.0000	5.0000
Q.40	2.6629	1.9259	1.3878	1.0000	5.0000
Q.41	2.9771	2.2638	1.5046	1.0000	5.0000
Q.42	2.2500	1.7568	1.3254	1.0000	5.0000
Q.43	2.4629	1.8018	1.3423	1.0000	5.0000
Q.44	2.7314	1.8068	1.3442	1.0000	5.0000

第2節 考 察

1. 学校間差・学年差・学級差について

学校・学年。クラスによって子どもたちの様子が異なってくることについては、前にも述べた。その集団を構成している集団成員・指導者や地域環境も違うため、当然のことと思われる。

調査校のうち、三木市立緑ヶ丘小学校と大口市立大口小学校と旭川市立富沢小学校について、実際、学校差が存在するかどうかについて検定した。そこから得られた結果から、学校差について考察していきたい。また、学年差では、調査校内の同学年を対象に、学級差では、一校内の同じ学年内の学級を対象として検定を行った。

(富沢小学校は構成人数が少ないため除く。)

学校間差などを検定する方法として、²検定・分散分析法・F検定・t検定の4種類の手法を利用した。

² 検定	
M校・O校・A校	$F^2 = 6140.62$ ***
	自由度=2
学年差	$F^2 = 54.8304$ ***
	自由度=2
学級差 (M校)	$F^2 = 492.935$ ***
	自由度=5
(O校)	$F^2 = 390.786$ ***
	自由度=5

M校 = 三木市立
緑ヶ丘小学校

O校 = 大口市立
大口小学校

A校 = 旭川市立
富沢小学校

***=1%水準以下で有意差が認められる

** =5%水準で有意差が認められる

* =10%水準で有意差が認められる

²検定で、質問に対する答え方に有意な差があるかどうかを検定できる。これから、学校別・学年別・校内における学級別のどれをとっても、0.1%水準で有意差が認められる。このことから、学校別にしろ、学年別にしろ、学級別にしろ、その区分内の個の集団はそれぞれ異質なものといえる。つまり、偶然的に差が現れたものではなく、学校学年 学級のそれぞれについて、差は存在するのである。

分散分析法

< M 校・O校・A校 >

縦の数=44

異なる要因の数= 3

Analysis of Variance for SPF. 1-Q Design

Source	SS	df	MS	F	p
Betw. sub.	2.6699	2	1.335	4.018	0.020 **
With. sub.	42.8646	129	0.3323		

Total	45.5346	131			
-------	---------	-----	--	--	--

No.	MEAN	SD
1	2.93	0.6529 (M 校)
2	3.07	0.5365 (O 校)
3	2.73	0.5099 (A 校)
Tot al	8.73	1.6359

分散分折法

< 学 年 差 >

縦の数= 44
異なる要因の数 =3

Analysis of Variance for SPF. 1-Q Design

Source	SS	df	MS	F	p
Betw. sub.	0.5669	2	0.283	0.884	0.581
With. sub.	41.3691	129	0.3207		
Total	41.9360	131			
No.	MEAN	SD			
1	3.06	0.5477(4 年生)			
2	3.08	0.5429(5 年生)			
3	2.93	0.5878(6 年生)			
Tot al	9.08	1.6465			

< 学級差 (M校) >

縦の数= 44
異なる要因の数 =6

Analysis of Variance for SPF 1-Q Design

Source	SS	df	MS	F	p
Betw. sub.	25.5624	5	5.112	9.011	0.000 ***
With. sub.	146.3790	258	0.5674		
Total	171.9414	263			
No.	MEAN	SD			
1	2.96	0.7365(6-1)			
2	2.81	0.6077 (6-3)			
3	3.36	0.8158(5-1)			
4	2.40	0.6545(5-2)			
5	2.80	0.8393(4-1)			
6	3.22	0.7854(4-2)			
Tot al	17.56	3.9300			

< 学級差 (O校) >

縦の数= 44
異なる要因の数 =7

Analysis of Variance for SPF 1-Q Design

Source	SS	df	MS	F	p
Betw. sub.	9.0192	6	1.503	4.524	0.000 ***
With. sub.	100.0058	301	0.3322		
Total	109.0251	307			

No.	MEAN	SD	
1	3.05	0.5309	(4-2)
2	3.05	0.5691	(4-3)
3	3.19	0.5010	(5-1)
4	3.38	0.6141	(5-2)
5	3.00	0.5428	(5-3)
6	2.79	0.5976	(6-1)
7	3.17	0.6223	(6-2)
Total	21.63	3.7441	

以上4つの表から、学校差と学年差は両方ともP値が10%を超えてるため、有意差がないといえる。しかし、残り2つの表（M校における同学年の学級差O校における同学年の学級差）が0.000%水準で限りなく有意差があると認められる。

F検定・t検定

< 学校差 >

a. 独立した二つの平均値の差及び分散の検定

LD	GROUP	NS	MEAN	SD
2	1	181	2	930 0.653 (M校)
	2	246	3	070 0.537 (O校)
2	1	24	2	730 0.510 (A校)
	2	181	2	930 0.653 (M校)
2	1	24	2	730 0.510 (A校)
2	2	46	3	070 0.537 (O校)

- b. 独立した二つの分散の差のF検定（両側検定）
 $F = 1.4832$ $DF = 180 / 245$ $P = 0.005$ （M校・O校） ***
 $F = 1.5800$ $DF = 180 / 23$ $P = 0.197$ （M校・A校）
 $F = 1.0653$ $DF = 245 / 12$ $P = 0.907$ （O校・A校）
- c. 独立した二つの平均の差のt検定（両側検定）
 $t = 2.3520$ $DF = 341$ $P = 0.036$ （M校・O校） **
 $t = 1.4364$ $DF = 203$ $P = 0.297$ （M校・A校）
 $t = 2.9652$ $DF = 268$ $P = 0.007$ （O校・A校） ***

< 学年差 >

- . 4年生・5年生
- a. 独立した二つの平均値の差及び分散の検定
- | LD | GROUP | NS | MEAN | SD |
|----|-------|-----|-------|-------------|
| 2 | 1 | 130 | 3.060 | 0.548 (4年生) |
| | 2 | 157 | 3.080 | 0.543 (5年生) |
- b. 独立した二つの分散の差のF検定（両側検定）
 $F = 1.0191$ $DF = 129 / 156$ $P = 0.907$
- c. 独立した二つの平均の差のt検定（両側検定）
 $t = 0.3083$ $DF = 285$ $P = 0.756$
- . 5年生・6年生
- a. 独立した二つの平均値の差及び分散の検定
- | LD | GROUP | NS | MEAN | SD |
|----|-------|-----|-------|-------------|
| 2 | 1 | 157 | 3.080 | 0.543 (5年生) |
| | 2 | 175 | 2.930 | 0.588 (6年生) |
- b. 独立した二つの分散の差のF検定（両側検定）
 $F = 1.1715$ $DF = 174 / 156$ $P = 0.314$
- c. 独立した二つの平均の差のt検定（両側検定）
 $F = 1.1715$ $DF = 174 / 156$ $P = 0.314$
 $t = 2.3993$ $DF = 330$ $P = 0.032$ **
- . 6年生・4年生
- a. 独立した二つの平均値の差及び分散の検定
- | LD | GROUP | NS | MBAN | SD |
|----|-------|-----|-------|-------------|
| 2 | 1 | 175 | 2.930 | 0.588 (6年生) |
| | 2 | 130 | 3.060 | 0.548 (4年生) |
- b. 独立した二つの分散の差のF検定（両側検定）
 $F = 1.1495$ $DF = 174 / 129$ $P = 0.404$
- c. 独立した二つの平均の差のt検定（両側検定）
 $t = 1.9597$ $DF = 303$ $P = 0.096$ *

— < 学級差 (M校) > —

a. 独立した二つの平均値の差及び分散の検定

LD	GROUP	NS	MEAN	SD
2	1	28	2.800	0.839 (4-1)
	2	29	3.220	0.785 (4-2)
2	1	30	3.360	0.816 (5-1)
	2	29	2.400	0.655 (5-2)
2	1	32	2.960	0.737 (6-1)
	2	33	2.810	0.608 (6-3)

b. 独立した二つの分散の差のF検定 (両側検定)

F = 1.1434 DF = 27 / 28 P = 0.725 (4-1・4-2)

F = 1.5518 DF = 29 / 28 P = 0.249 (5-1・5-2)

F = 1.4703 DF = 31 / 32 P = 0.284 (6-1・6-3)

c. 独立した二つの平均の差のt検定 (両側検定)

t = 1.9169 DF = 55 P = 0.115 (4-1・4-2)

t = 4.8904 DF = 57 P = 0.000 (5-1・5-2) ***

t = 0.8829 DF = 63 P = 0.616 (6-1・6-3)

— < 学級差 (O校) > —

a. 独立した二つの平均値の差及び分散の検定

LD	GROUP	NS	MEAN	SD
2	1	36	3.190	0.531 (4-2)
	2	37	3.050	0.569 (4-3)
2	1	36	3.190	0.501 (5-1)
	2	32	3.380	0.614 (5-2)
2	1	32	3.380	0.614 (5-2)
	2	30	3.000	0.543 (5-3)
2	1	36	3.190	0.501 (5-1)
	2	30	3.000	0.543 (5-3)
2	1	37	2.790	0.598 (6-1)
	2	38	3.170	0.622 (6-2)

b. 独立した二つの分散の差のF検定 (両側検定)

F = 0.1482 DF = 36 / 35 P = 0.683 (4-2・4-3)

F = 1.5078 DF = 31 / 35 P = 0.240 (5-1・5-2)

F = 1.2772 DF = 31 / 29 P = 0.510 (5-2・5-3)

F = 1.1806 DF = 29 / 35 P = 0.633 (5-1・5-3)

F = 1.0836 DF = 37 / 36 P = 0.811 (6-1・6-2)

c. 独立した二つの平均の差のt検定 (両側検定)

t = 1.0712 DF = 71 P = 0.575 (4-2・4-3)

t = 1.3830 DF = 66 P = 0.336 (5-1・5-2)

t = 2.5331 DF = 60 P = 0.027 (5-2・5-3)

t = 1.4543 DF = 64 P = 0.294 (5-1・5-3)

t = 2.6600 DF = 73 P = 0.019 (6-1・6-2)

F検定で、独立した二つの分散の差、つまり答え方にばらつきの差が有意なものであると認められるものを挙げてみると、学校間のM校・O校間が、0.1%水準で認められるだけである。t検定で、独立した二つの平均の差、つまり答え方の差が有意であると認められるものは、学校間（M校・O校 / O校・A校）がそれぞれ0.1%・5%水準。学年間の5年生・6年生で1%水準、4年生・6年生で10%水準、学級間ではM校の5-1と5-2で0.1%未満の水準、O校の5-2と5-3、6-1と6-2で共に1%水準で認められる。

まとめると、学校間では、答え方のばらつきも平均も差が存在し、学年間では、4・5年生ではほとんど同等であるが、5・6年生、4・6年生共に答え方の平均に差が存在する。また、同じ学校内の同じ学年内の学級間では、4年生は差がないが、M校・O校の5年生、O校の6年生で答え方の平均に差が存在することがわかる。

以上、すべての検定結果を表に現してみた。

< 結果表 >

	学 校 間			学 年 間			学 級	間
	M・O	M・A	A・O	4・5	5・6	4・6	M校	O校
² 検定								
分散分析法								
F検定								
t検定								
備考							5-1 / 5-2	5-2 / 5-3 6-1 / 6-2

*** = 1%水準以下で有意差が認められる

** = 5%水準で有意差が認められる

* = 10%水準で有意差が認められる

結果表から、²検定ですべて、分散分析法t検定でもほとんどの場合に有意差が存し、歌唱に関するアンケートの答え方には、学校・学年・学級などの集団ごとの差が明確に現れるといえる。しかし、P 検定では、M校・O校間を除いたすべてに有意差がないことから、分散の差がないことがわかる。

(図表9) 歌唱に関するアンケート 固有价值 寄与率

	固有价值	寄与率	累積寄与率
1	13.6668	31.0609	31.0609
2	2.6669	6.0612	37.1221
3	2.0716	4.7082	41.8303
4	1.5206	3.4558	45.2862
5	1.4096	3.2036	48.4897
6	1.2840	2.9182	51.4079
7	1.0928	2.4837	53.8916
8	1.0632	2.4164	56.3080
9	1.0508	2.3882	58.6961
10	0.9188	2.0882	60.7843
11	0.8486	1.9285	62.7128
12	0.8057	1.8312	64.5440
13	0.7749	1.7610	66.3051
14	0.7419	1.6862	67.9913
15	0.7328	1.6655	69.6567
16	0.7097	1.6130	71.2698
17	0.6891	1.5660	72.8358
18	0.6732	1.5301	74.3658
19	0.6429	1.4611	75.8269
20	0.6313	1.4348	77.2617
21	0.6047	1.3744	78.6361
22	0.5750	1.3068	79.9429
23	0.5518	1.2540	81.1969
24	0.5379	1.2224	82.4193
25	0.5259	1.1951	83.6145
26	0.5043	1.1460	84.7605
27	0.5022	1.1414	85.9019
28	0.4834	1.0986	87.0005
29	0.4565	1.0374	88.0379
30	0.4435	1.0079	89.0457
31	0.4344	0.9872	90.0329
32	0.4236	0.9628	90.9957
33	0.4126	0.9378	91.9335
34	0.3979	0.9042	92.8377
35	0.3919	0.8908	93.7285
36	0.3716	0.8446	94.5731
37	0.3597	0.8174	95.3905
38	0.3383	0.7689	96.1594
39	0.3168	0.7200	96.8794
40	0.3014	0.6851	97.5646
41	0.2922	0.6640	98.2285
42	0.2688	0.6108	98.8393
43	0.2626	0.5969	99.4362
44	0.2482	0.5641	100.000

(図表10) 歌唱に関するアンケート

回転による因子負荷量

質 問 項 目	1	2	3	4	5	6	共通性
Q.1 音楽の授業の時に歌いたい	0.1976	0.1327	0.5176	0.0884	-0.3215	-0.2013	0.4762
Q.2 学校の行事の時に歌いたい	0.1280	0.2913	0.4730	-0.0377	-0.3048	-0.1988	0.4588
Q.3 休み時間の時に歌いたい	0.1287	0.6828	0.1524	0.0472	-0.1294	-0.0612	0.5287
Q.4 学校の行き、帰りに歌いたい	0.1711	0.6668	0.1481	0.1044	0.1246	-0.0839	0.5292
Q.5 遊んでいる時に歌いたい	0.2470	0.6612	0.0693	-0.0133	0.0682	-0.1097	0.5199
Q.6 周りの人と一緒に歌いたい	0.3305	0.3669	0.2841	-0.0009	-0.2524	-0.1293	0.4050
Q.7 一人でいる時に歌いたい	0.2311	0.4321	-0.0051	-0.1530	-0.1717	-0.1405	0.3127
Q.8 お風呂に入っている時に歌いたい	0.3748	0.3780	-0.0282	-0.1030	-0.1338	-0.2215	0.3617
Q.9 退屈な時に歌いたい	0.4870	0.3265	0.0624	-0.0343	-0.2650	-0.1716	0.4485
Q.10 知っている曲が流れている時に歌いたい	0.6754	0.1484	0.1511	-0.0617	-0.2421	-0.0954	0.5726
Q.11 気持ちがうきうきしているときに歌いたい	0.4948	0.2483	0.2325	-0.0583	-0.3138	-0.0720	0.4676
Q.12 気持ちが沈んでいる時に歌いたい	0.0922	0.4417	0.1207	-0.2332	-0.0245	-0.0877	0.2808
Q.13 学校の授業で習った歌を歌いたい	0.0979	0.1821	0.5936	0.0096	-0.2295	-0.0911	0.4562
Q.14 給食や掃除の時間に流れる歌を歌いたい	0.0911	0.4931	0.2174	-0.1103	-0.0347	-0.1249	0.3276
Q.15 小さい時によく聞かされた歌を歌いたい	0.1787	0.3829	0.3179	-0.1914	-0.1150	-0.1521	0.3526
Q.16 元気がでる歌を歌いたい	0.4832	0.1546	0.2835	-0.2470	-0.2844	-0.1026	0.4902
Q.17 メロディーが好きな曲を歌いたい	0.4875	0.1617	0.2467	-0.1879	-0.2667	-0.0211	0.4315
Q.18 歌詞が好きな歌を歌いたい	0.5053	0.1675	0.1846	-0.0618	-0.3216	-0.0384	0.4262
Q.19 テレビなどでよく聞く歌を歌いたい	0.6077	0.0545	0.0462	-0.1122	-0.1009	-0.0833	0.4041
Q.20 好きな歌手が歌っている歌を歌いたい	0.5639	0.2307	0.0699	-0.0792	-0.0112	-0.1225	0.3975
Q.21 友だち同志ではやっている歌を歌いたい	0.5848	0.1447	0.2293	-0.1875	-0.0012	-0.0309	0.4516
Q.22 歌詞のない器楽曲を歌いたい	0.1948	0.2863	0.4142	-0.2543	-0.1067	-0.0585	0.3710
Q.23 みんなで合唱する時に歌いたい	0.2142	0.1210	0.5932	0.1041	-0.1561	-0.2881	0.5306
Q.24 みんなで同じメロディーを歌いたい	0.3595	0.1151	0.5620	-0.0604	-0.1704	0.0215	0.4915
Q.25 何人かでみんな違うメロディーを歌いたい	0.2843	0.2417	0.2816	-0.1932	-0.1097	-0.2381	0.3246
Q.26 一人で皆の前で歌いたい	-0.0754	0.3333	0.1965	-0.1861	0.0712	-0.3919	0.3487
Q.27 発表会や演奏会で歌いたい	0.1794	0.1458	0.4237	-0.0113	-0.1262	-0.4178	0.4235
Q.28 伴奏を付けて歌いたい	0.5088	0.0886	0.3321	-0.1447	-0.2411	-0.1478	0.4779
Q.29 伴奏を付けなくて歌いたい	-0.0083	0.3633	0.2193	-0.1459	-0.1065	-0.2087	0.2564
Q.30 楽しいから歌いたい	0.4109	0.1768	0.2169	-0.0110	-0.3482	-0.3259	0.4747
Q.31 上手に歌いたい	0.3891	0.0132	0.1692	-0.1339	-0.5840	-0.0746	0.5448
Q.32 曲を覚え、歌えるようになりたい	0.5661	0.0290	0.1580	-0.0383	-0.4470	-0.1581	0.5725
Q.33 歌うことが好きだから歌いたい	0.3921	0.2390	0.2618	0.1125	-0.3832	-0.3813	0.5843
Q.34 歌わないと、叱られたり何回も歌わされたくない	0.1366	-0.1583	-0.0556	-0.2978	-0.0600	0.1214	0.1538
Q.35 みんなが歌っているから歌おうと思う	0.1229	0.0618	0.1689	-0.0739	-0.2736	0.0633	0.1318
Q.36 歌う時、きれいな声を出そうと思う	0.2565	0.0692	0.1333	-0.1500	-0.6671	-0.1947	0.5937
Q.37 歌う時、姿勢に気をつけようと思う	0.0352	0.1909	0.2928	-0.0339	-0.5777	-0.1667	0.4861
Q.38 歌う時、はっきり発音しようと思う	0.3125	0.2111	0.1890	-0.1054	-0.6194	-0.0906	0.5810
Q.39 納得がいくまで何回も歌いたい	0.2632	0.3490	0.1585	-0.1941	-0.3072	-0.3931	0.5028
Q.40 勝手にメロディーを創って歌いたい	0.1603	0.2682	0.0397	-0.5752	-0.1581	-0.3106	0.5516
Q.41 歌詞を自分で換えて歌いたい	0.1841	0.2366	0.0130	-0.5945	-0.0928	-0.0901	0.4602
Q.42 人が歌っている時に他のパートを付けて歌いたい	0.2487	0.3564	0.2989	-0.2910	-0.2007	-0.1870	0.4382
Q.43 自分から進んで歌いたい	0.2973	0.3601	0.1853	-0.0959	-0.1876	-0.4659	0.5139
Q.44 歌う時は恥ずかしくない	0.1341	0.2176	0.1431	-0.0326	-0.1532	-0.4679	0.3293
固有値	5.0982	4.0764	3.2602	1.4939	3.3492	1.9641	19.2419

(図表11) 歌唱に関する因子分析結果 1992 . 12 . 1

質 問 項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	共通性
Q.10 知っている曲が流れている時に歌いたい	0.6754	0.1484	0.1511	-0.0617	-0.2421	-0.0954	0.5726
Q.19 テレビなどでよく聞く歌を歌いたい	0.6077	0.0545	0.0462	-0.1122	-0.1009	-0.0833	0.4041
Q.21 友だち同志ではやっている歌を歌いたい	0.5848	0.1447	0.2293	-0.1875	-0.0012	0.0309	0.4516
Q.32 曲を覚え、歌えるようになりたい	0.5661	0.0290	0.1580	-0.0383	-0.4470	-0.1581	0.5725
Q.20 好きな歌手が歌っている歌を歌いたい	0.5639	0.2307	0.0699	-0.0792	-0.0112	-0.1225	0.3975
Q.28 伴奏を付けて歌いたい	0.5088	0.0886	0.3321	-0.1447	-0.2411	-0.1478	0.4779
Q.18 歌詞が好きな歌を歌いたい	0.5053	0.1675	0.1846	-0.0618	-0.3216	-0.0384	0.4262
Q.11 気持ちがうきうきしているときに歌いたい	0.4948	0.2483	0.2325	-0.0583	-0.3138	-0.0720	0.4676
Q.17 メロディーが好きな曲を歌いたい	0.4875	0.1617	0.2467	-0.1879	-0.2667	0.0211	0.4315
Q.9 退屈な時に歌いたい	0.4870	0.3265	0.0624	-0.0343	-0.2650	-0.1716	0.4485
Q.16 元気がでる歌を歌いたい	0.4832	0.1546	0.2835	-0.2470	-0.2844	-0.1026	0.4902
Q.30 楽しいから歌いたい	0.4109	0.1768	0.2169	-0.0110	-0.3482	-0.3259	0.4747
Q.33 歌うことが好きだから歌いたい	0.3921	0.2390	0.2618	0.1125	-0.3832	-0.3813	0.5843
Q.25 何人かでみんな違うメロディーを歌いたい	0.2843	0.2417	0.2816	-0.1932	-0.1097	-0.2381	0.3246
Q.3 休み時間の時に歌いたい	0.1287	0.6828	0.1524	0.0472	-0.1294	-0.0612	0.5287
Q.4 学校の行き、帰りに歌いたい	0.1711	0.6668	0.1481	0.1044	-0.1246	-0.0839	0.5292
Q.5 遊んでいる時に歌いたい	0.2470	0.6612	0.0693	-0.0133	-0.0682	-0.1097	0.5199
Q.14 給食や掃除の時間に流れる歌を歌いたい	0.0911	0.4931	0.2174	-0.1103	-0.0347	-0.1249	0.3276
Q.12 気持ちが沈んでいる時に歌いたい	0.0922	0.4417	0.1207	-0.2332	-0.0245	-0.0877	0.2808
Q.7 一人でいる時に歌いたい	0.0051	0.4321	-0.0051	-0.1530	-0.1717	-0.1405	0.3127
Q.15 小さい時によく聞かされた歌を歌いたい	0.1787	0.3829	0.3179	-0.1914	-0.1150	-0.1521	0.3526
Q.8 お風呂に入っている時に歌いたい	0.3748	0.3780	0.0282	-0.1030	-0.1338	-0.2215	0.3617
Q.6 周りの人と一緒に歌いたい	0.3305	0.3669	0.2841	-0.0009	-0.2524	-0.1293	0.4050
Q.29 伴奏を付けずに歌いたい	0.0083	0.3633	0.2193	-0.1459	-0.1065	-0.2087	0.2564
Q.42 人が歌っている時に他のパートを付けて歌いたい	0.2487	0.3564	0.2989	-0.2910	-0.2007	-0.1870	0.4382
Q.13 学校の授業で習った歌を歌いたい	0.0979	0.1821	0.5936	0.0096	-0.2295	-0.0911	0.4562
Q.23 みんなで合唱する時に歌いたい	0.2142	0.1210	0.5932	0.1041	-0.1561	-0.2881	0.5306
Q.24 みんなで同じメロディーを歌いたい	0.3595	0.1151	0.5620	-0.0604	-0.1704	0.0215	0.4915
Q.1 音楽の授業の時に歌いたい	0.1976	0.1327	0.5176	0.0884	-0.3215	-0.2013	0.4762
Q.2 学校の行事の時に歌いたい	0.1280	0.2913	0.4730	-0.0377	-0.3048	-0.1988	0.4588
Q.27 発表会や演奏会で歌いたい	0.1794	0.1458	0.4237	-0.0113	-0.1262	-0.4178	0.4235
Q.22 歌詞のない器楽曲を歌いたい	0.1948	0.2863	0.4142	-0.2543	-0.1067	-0.0585	0.3710
Q.41 歌詞を自分で換えて歌いたい	0.1841	0.2366	0.0130	-0.5945	-0.0928	-0.0901	0.4602
Q.40 勝手にメロディーを創って歌いたい	0.1603	0.2682	0.0397	-0.5752	-0.1581	-0.3106	0.5516
Q.34 歌わないと、叱られたり何回も歌わされたくない	0.1366	0.1583	0.0556	-0.2978	-0.0600	0.1214	0.1538
Q.36 歌う時、きれいな声を出そうと思う	0.2565	0.0692	0.1333	-0.1500	-0.6671	-0.1947	0.5937
Q.38 歌う時、はっきり発音しようと思う	0.3125	0.2111	0.1890	-0.1054	-0.6194	-0.0906	0.5810
Q.31 上手に歌いたい	0.3891	0.0132	0.1692	-0.1339	-0.5840	-0.0746	0.5448
Q.37 歌う時、姿勢に気をつけようと思う	0.0352	0.1909	0.2928	-0.0339	-0.5777	-0.1667	0.4861
Q.35 みんなが歌っているから歌おうと思う	0.1229	0.0618	0.1689	-0.0739	-0.2736	0.0633	0.1318
Q.44 歌う時は恥ずかしくない	0.1341	0.2176	0.1431	-0.0328	-0.1532	-0.4679	0.3293
Q.43 自分から進んで歌いたい	0.2973	0.3601	0.1853	-0.0959	-0.1876	-0.4659	0.5139
Q.39 納得がいくまで何回も歌いたい	0.2632	0.3490	0.1585	-0.1941	-0.3072	-0.3931	0.5028
Q.26 一人で皆の前で歌いたい	-0.0754	0.3333	0.1965	-0.1861	-0.0712	-0.3919	0.3487
固 有 値	5.0982	4.0764	3.2602	1.4939	3.3492	1.9641	19.2419

1. 因子について

第1因子<習慣性の因子> 固有値 5.0982

- 問10 知っている曲が流れているときに歌いたい
- 問19 テレビなどでよく聞く歌を歌いたい
- 問21 友だち同志ではやっている歌を歌いたい
- 問32 曲を覚え、歌えるようになりたい
- 問20 好きな歌手が歌っている歌を歌いたい
- 問28 伴奏を付けて歌いたい
- 問18 歌詞が好きな曲を歌いたい
- 問11 気持ちがうきうきしているときに歌いたい
- 問17 メロディが好きな曲を歌いたい
- 問9 退屈なときに歌いたい
- 問16 元気が出る歌を歌いたい
- 問30 楽しいから歌いたい
- 問33 歌うことが好きだから歌いたい
- 問25 何人かでみんな違うメロディを歌いたい

第1因子では、以上の14項目が挙げられる。

これらの項目の中で特に因子負荷量が高かった5項目に共通していることは、知っている歌を歌う、ということである。

知っている、と言うことは、子どもたちの日常生活の中にその歌がたとえ1フレーズでも入り込んでいることである。そのような歌は既に子どもたちの中で、習慣化されているといってもよいだろう。その他の因子に関しても、好きな・楽しい・元気が出るなど、歌に対する親しみを感じさせる項目が多い。親しみのある歌は、確実に覚えてなくても、何かの拍子にふとメロディーや歌詞が浮かんでくるものである。

日常生活の中で習慣化されているものといえば、多大な情報を提供するテレビがある。子どもたちだけでなく、私たちの生活は、テレビに対する依存度が高いといえる。子どもたちの音楽に関する好みは、テレビから影響を受けることが大きい。(注4) 子どもたちは、好きなテレビ番組を見、そこから音楽の好みを形成してゆく。友だち同志でよくはやる歌というのも、実は、日常生活で習慣化してしまっているテレビから影響を受けているのである。

よって、この因子を『習慣性の因子』と命名した。

第2因子<リラックス（解放）の因子> 固有値 4.0764

- 問3 休み時間のときに歌いたい
- 問4 学校の行き、帰りに歌いたい
- 問5 遊んでいるときに歌いたい
- 問14 給食や掃除の時間に流れる歌を歌いたい
- 問12 気持ちが沈んでいるときに歌いたい

- 問7 一人でいるときに歌いたい
- 問15 小さい頃によく聞かされた歌を歌いたい
- 問8 お風呂に入っているときに歌いたい
- 問6 周りの人と一緒に歌いたい
- 問29 伴奏を付けなくて歌いたい
- 問42 人が歌っているときに他のパートを付けて歌いたい

ここでは、日常生活の中で比較的リラックスしてる場面での歌唱であるといえる。集中しているときや緊張しているときなどでは、歌を歌うことなど思いつかないし、そんな余裕はない。しかし、緊張が途切れ、肩の力を抜いてリラックスしたとき、ふと歌を口ずさんでいる自分に気づくことがある。例えば、問3問4・問5・問14・問7・問8などがそうである。そのようなときは、伴奏さえも必要としない。力まないで自然に歌えるのである。そうして歌うことよって、気分転換をはかることができる。従って、この因子を『リラックス（解放）の因子』と命名した。

第3因子<集団行動（同調）の因子> 固有値 3.2602

- 問13 音楽の授業で習った歌を歌いたい
- 問23 みんなで合唱するときに歌いたい
- 問24 みんなで同じメロディーを歌いたい
- 問1 音楽の授業のときに歌いた
- 問2 学校の行事のときに歌いたい
- 問27 発表会や演奏会で歌いたい
- 問22 歌詞のない器楽曲を歌いたい

ここでは、問22を除いてみんなで歌うという、一種の集団行動的な心理が働いているといえる。また、まわりのみんなが声を出して歌っているから自分も一緒に歌おうとか、一人で歌うことは勇気がいるけれどもみんなと一緒になら、緊張するであろう発表会や演奏会も恐くない、といった感覚が見受けられる。

これが集団の持つ特質なのである。このようなことは特別なことではなく、子どもに限らず、日常生活のなかでも有り得ることである。そこで、この因子を『集団行動（同調）の因子』と命名した。

第4因子<自発性の因子> 固有値 1.4939

- 問41 歌詞を自分で換えて歌いたい
- 問40 勝手にメロディーをつくって歌いたい
- 問34 歌わないと、叱られたり何回も歌わされたくない

決まった歌を良く歌っていると、だんだん歌詞やメロディーが変わってきたり、わざと歌詞を換えて楽しんだり、ちょっとした言葉にふと思いついたメロディーをつけて口ずさんだりすることはよくあることである。そういうときは、作曲を行う際の形式など

関係なくて、音楽する上での何の束縛も受けなくて、自分だけのものとして歌を楽しめる。そのような意味では、問34と同じで、歌うというのは、強制されたり叱られるなどの罰を負わされたりしないものなのである。

のように、他から圧力を受けなくて自分から主体的に歌おうとしたり、歌の歌詞やメロディーをつくったりすることから、『自発性の因子』と命名した。

第5因子 < 向上の因子 > 固有値 3.3492

問36 歌うとき、きれいな声を出そうと思う

問38 歌うとき、はっきり発音しようと思う

問31 上手に歌いたい

問37 歌うとき、姿勢に気をつけようと思う

問35 みんなが歌っているから歌おうと思う

この5項目は、問35以外はすべて歌うときの心構えや態度に関するものである。特に、問36・問38・問37は、教師から受ける注意事項と重なっていると思われる。

歌うからには、いま以上のものを自分に求め、さらに上達したいと思うことは歌だけに限らず、誰にでも何に対してでもあることである。また、このような気持ちを持つことによって、さらに次の段階へステップアップすることが可能になり、自分の音楽の世界が広がっていくのである。

よって『向上の因子』と命名した。

第6因子 < 欲求抑止の因子 > 固有値 1.9641

問44 歌うときは恥ずかしくない

問43 自分から進んで歌いたい

問39 納得がいくまで何回も歌いたい

問26 一人でみんなの前で歌いたい

一人で何かをするとき、妨げとなるものが何もないとやさしいことである。しかし、一人で人前で歌ったり、自分から進んで何かをすることとは非常に勇気のいることであり、また、恥ずかしさなど様々な思惑が邪魔してなかなか難しいものである。

本当は、歌いたい気分のときに、思いきり歌うことが自然なのである。それが歌唱の本来の姿であるべきなのに、その気持ちを押しやってしまうのである。

このように、何かしようとしても恥ずかしい思いをしたくない、失敗したくない、という強い抑制が現れているので、第6因子は『欲求抑止の因子』と命名した。

< 引用文献 >

- 1) 小林利宣編：【増補版】教育臨床心理学事典，北大路書房，1980，p 202
- 2) 注1の書，p 299
- 3) 細谷俊夫 / 奥田真丈 / 河野重男編：教育学大事典第5巻，第一法規出版，1978，p 281
- 4) NHK放送世論調査所編：現代人と音楽，日本放送出版協会，1982，p 72

第 四 章 ま と め

第 1 節 ま と め

調査結果と因子分析により、抽出された 6 因子について総合考察を行うことにする。

第 1 因子〈習慣性の因子〉

習慣というのは、後天的に形成された反応形式である。また、人によって様々であり、生活様式によく現れているといえるだろう。たとえば、歯磨き一つにしても、食前であったり、食後であったり、寝る前にしたりする。また、いつも定刻に起床している人は、休みの日でもその時刻になると目が覚めてしまう、など日常生活のほんの些細な動作まで、種々多様である。

歌唱においてもある意味では、同じことがいえる。いつも大きな声で、自分の好きな歌を歌っている子どもにとって、歌は、欠くことのできない存在であり、歌うことに意欲的である。しかし、反対に、歌ったり鑑賞したりすることなど、音楽に接することが少ない子どもにとって、音楽の授業で歌うことは、習慣に反することなのである。また、普段はよく歌っていたり、休み時間などでは活発な子どもでも、授業になると途端に別人のようになってしまう子どももいる。それは、そのようになってしまう何らかの原因が、子どもに習慣づけたのかも知れない。

第 1 因子の中で因子負荷量が高かった 5 項目のうち、問 10「知っている曲が流れているときに歌いたい」、問 19「テレビなどでよく聞く歌を歌いたい」、問 21「友だち同志ではやっている歌を歌いたい」、問 20「好きな歌手が歌っている歌を歌いたい」の 4 項目は、いずれもテレビと深いかわりがある。テレビは今や人々の生活の中に深く根付いている。習慣というよりも生活の一部と化しているのかも知れない。そのため、子どもたちの好きな歌や興味をひく歌は、テレビで流れる歌と密接な関連があるに違いない。

もう一つ、子どもたちの生活で習慣化しているものがある。最近、やや納まった憾のあるファミコンブームである。ゲーム中、何度も繰り返して流れるメロディーは、いつのまにか記憶され、ふと口をついて出てくることもある。それは、テレビの CM ソングなどと同じ性質を持っているといえるだろう。歌唱に関して、習慣は大きな影響力を持っていることが、明確になったのである。

第 2 因子〈リラックス（解放）の因子〉

歌を歌うときに、肩や喉に力が入ったりしていると、美しい声にはならない。また、そんな歌い方をしているとき、楽しいといえるだろうか。音楽の授業の歌唱のテストのときなど、いつもほど歌えなかったという思い出は、誰にでもあると思う。そのようなときは、いつもと違う状況であるために、緊張して体のどこかに無用な力が入っていたのかも知れない。このような意味で、リラックスするとは、歌唱にプラスであると思われる。

とかく教師は、歌とはこのようなものだとばかりに、コンクールの上位入賞校のビデオテープなど聴かせたり、教材の見本を聴かせる。確かに、さらに歌唱技術を向上させることも音楽教育の目的の一つである。しかし、それは歌う楽しさや充実感などを得て、はじめてかなうことである。義務感で歌っているうちから、こんな風に歌いなさいと指導されても、子どもたちに歌いたいという気持ちが生まれるかどうかは疑問である。教師

側からの働きかけで歌わせるだけでなく、子どもが自然に歌いたいと思わせ、自分たちから歌うように仕向けるにも、リラックスして体の無用な力を抜いて、歌いたい雰囲気をつくることも大切な要素であるといえる。

第3因子<集団行動(同調)>

私たちの周囲には、いろいろな集団が見られる。たとえば、学級集団をはじめとして、サークル仲間、趣味の仲間など大小さまざま存在する。(注1) 集団の構成者を集団成員といい、集団成員相互の類似性を生み出す力を斉一性への圧力(pressure of Uniformity)、この圧力に対して集団成員が同調していくことを同調行動(coformity)という。(注2) これを研究しているアッシュ(Asch, A. E., 1955, 1974)の有名な実験によると、12回中一人平均3~4回の同調行動を示している。(注3) 授業中に、大きな声か小さな声か怒鳴り声かきれいな声かで歌うことを決定するにも、この同調行動に大きく左右されるといえる。

学校というものは、子どもたちを、学習活動に限らず学校生活のほとんどが集団を基盤として行動するようにさせるため、一つ一つの集団についてその特徴を把握しておく必要がある。このことから、音楽の授業のときもこの集団の持つ特質を踏まえた上で行うべきであるといえる。しかし、あのクラスは歌わないとか、このクラスはよく歌うなどと決めつけるようなことがあってはならない。歌わなくさせているのは、教師にも責任があるからである。

第4因子<自発性の因子>

前述したように、音楽教育だけでなく教育全般は、子どもの自発性をひとつの拠所としている。(注4) 歌おうという意欲から、実際に歌い、歌うことに喜びを感じると、さらに次の歌を歌おうとする。

それは、たとえば算数と同じで、1問解けると次の問題に挑戦しようとする意欲が湧いてくる。このように、学習とは教育的に積極的な価値を持つ行動傾向や認識の獲得を意味するのである。(注5)

第4因子では、問41・問40などのように、ただ歌うのではなく、対象となる歌に歌詞やメロディーを自分で換えたりつくったりして歌いたいという項目が挙がっている。ここに、ただ単に楽譜通りに歌う以上に、自分風にアレンジして音楽を楽しむという、新しい音楽の世界がある。それは、創造の世界に他ならない。

子どもの自発性が、次の段階への興味や要求を引き起こしていく。その繰り返しが、子どもをより高尚な音楽へと導くのである。教師は、子どもの自発性を養い、さらに子どもが成長していけるような支えにならなければならないといえる。

第5因子<向上の因子>

ある合唱曲を仕上げるとき、いろいろな段階が考えられる。たとえばまず、メロディーを覚え、歌詞を覚え、各パートに分けてハーモニーを形成する。ある程度子どもたちが歌うようになった後、さらに音楽的表現の豊かさを求めるとき、どのように働きかけるべきなのだろうか。一般的に、教師は「もっときれいな声で」、「ここが曲の盛り上がりだからしっかり歌いましょう」など、子どもたちに言葉懸けをする。きれいな声とはど

んな声なのか。曲の盛り上がりがたとえその部分だとしても、どうして最初から決めてしまうのだろうか。このような指導では、教師の理想像の押しつけにしかない。子どもたちがその要求に対してその通りに歌っても、その音楽に、果たして人の心を揺さぶる力があるだろうか。

歌というものは、楽器の演奏のように学習の結果がはっきりしないため、成就感がない。^{注6)} そのため、発声などに重点を置きやすい。確かに、正しい発声法の習得は避けられない問題であるが、歌唱とは、まず、声を出して歌うことから始まるのである。それを忘れてしまうと、子どもたちの歌に対する向上への意欲が失われてしまうのである。^(注7) 歌唱活動では、いかに向上心を持たせるかということも重要なポイントなのである。

第6因子〈欲求抑止の因子〉

欲求の概念については以前述べた通りであるが、その欲求は、環境条件(誘因、刺激)と個体内の条件(動因、欲求)が解発させる要因となる。また、欲求は、生理的欲求・認知的欲求・社会的欲求の3種類に分けることができる。歌唱行為は、社会的自己の維持と成長を求める社会的欲求の承認の欲求に該当する。^(注8) 第6因子である、問44「歌うときは恥ずかしくない」・問43「自分から進んで歌いたい」・問26「一人でみんなの前で歌いたい」は、因子負荷量がマイナスの値をとっていることから、これらの項目に対して否定意識が働いており、これは先ほど述べた社会的欲求の恥の回避に相当する。成長するに従って、子どもの中にいわゆる恥ずかしさという心理が芽生える。失敗して恥ずかしい思いをしたくない、とつい気持ちが人前で歌うことに強い危倶感を抱かせるのである。その危倶感を取り除いてやることから、歌うことが始まるのである。

以上で6因子の総合的考察を終わる。

これらの因子は、すべて音楽教育だけにいえることではなく、教育全般にわたっていえると思われる。また、これらの因子以外にも、個人の能力差なども考えられる。しかし、ある程度はこれらの因子でカバーすることが可能であると思われる。

今まで何度も述べてきたように、歌とは人間の生活と密接なつながりがあり、豊かな生活を送る上で、音楽は欠かせないものだといえる。それが、学校教育の場に目を転じたとき、果たして音楽は、それほど重要な扱いを受けているのだろうか、と疑問に思える。確かに楽しいだけでは、授業は成り立たない。しかし、楽しくなければ、音楽ではないのである。同じように、歌わなければ歌の素晴らしさを感じることはできない。だからといって、強制したりしてはならない。歌唱活動だけが音楽ではないが、子どもたちに、歌うとはどういうことなのか、歌の素晴らしさなどから、教えていくことが、本来の姿であるといえると思う。

< 引用文献 >

- (注1) 鈴木清編：心理学経験と行動の科学，ナカニシヤ出版，1988，p 98
- (注2) 注1の書，P 100
- (注3) 注1の書，p 100
- (注4) 浅香淳編：小学校音楽教育講座第1巻音楽と教育，音楽之友社，1982，p 41
- (注5) 細谷俊夫 / 奥田真丈 / 河野重男編 = 教育学大事典第1巻，第一法規，1978，p 243
- (注6) 木本治子 / 柳生力編：教育大学教科教育講座10「音楽科教育の理論と展開」，第一法規，1980，p 72
- (注7) 注6の書，p 72

< 参考文献一覧 >

- (1) 佐瀬仁：音楽心理学，音楽之友社，1962
- (2) J. L. マーセル / M. グレン：供田武嘉津訳，音楽教育心理学，音楽之友社，1965
- (3) 梅本堯夫：音楽心理学，誠信書房，1966
- (4) 関計夫：新しい音楽心理学，音楽之友社，1967
- (5) J. L. マーセル：美田節子訳，音楽教育と人間形成，音楽之友社，1967
- (6) J. L. マーセル：美田節子訳，音楽的成長のための教育，音楽之友社，1971
- (7) 日部三郎：下手でもいい音楽の好きな子どもを，音楽之友社，1975
- (8) 東京教育大学附属小学校初等教育研究会編：音楽科教育における現代的課題，泰流社，1977
- (9) 細谷俊夫 / 奥田真丈 / 河野重男編：教育学大事典，第一法規，1978
- (10) 園部三郎：続下手でもいい音楽の好きな子どもを，音楽之友社，1979
- (11) 小林利宣編：【増補版】教育臨床心理学事典，北大路書房，1980
- (12) 木本治子 / 柳生力編：教育大学教科教育講座 10「音楽科教育の理論と展開」，第一法規，1980
- (13) 小島美子 = 歌をなくした日本人，音楽之友社，1981
- (14) 浅香淳編：小学校音楽教育講座第1巻音楽と教育，音楽之友社，
- (15) 小山章三：合唱と教育と一音楽教師の手記，音楽之友社，1982
- (16) NHK放送世論調査所編：現代人と音楽，日本放送出版協会，1982
- (17) 大村平：多変量解析のはなし，(株)日科技連出版社，1985
- (18) 真篠将先生退官記念著作集編集委員会編：真篠将音楽教育を語る，音楽之友社，1986
- (19) 柳生力：自分のためにうたがあるとき，音楽之友社，1986
- (20) 鈴木清編：心理学経験と行動の科学，ナカニシヤ出版，
- (21) 月刊「教育音楽」小学版，音楽之友社，1983～1992
- (22) 季刊「音楽教育研究」，音楽之友社，1984、1991
- (23) 文部省：小学校学習指導要領（音楽編），1989
- (24) 文部省：小学校指導書（音楽編），教育芸術社，1989

< 参考資料 >

- (1) 教育課程研究推進委員会編：音楽教育課程研究の現状と課，，日本音楽教育学会，1988
- (2) 中村めぐみ：兵庫教育大学学校教育学部 卒業論文「楽しい音楽の授業を目指す指導の研究」，1989
- (3) (株)日本能率協会総合研究所：多変量解析パッケージマニュアル

おわりに

小学校6年生のとき、クラスで「勇気ひとつを友にして」を合唱したとき、メロディーパートは私を含め5～6人であったのに、もう一方のパートより勝っていました。このとき初めて小さな声でしか歌わない人もいるんだ、ということを知ったのです。しかし、そんな出来事も忘れ、中学生になるとすぐに私も歌わなくなっていました。それからずっと、思いきり歌ったりすることをしないままだったのが、本大学で声楽を学んでから、また歌うことを思い出したことが、この研究をはじめのきっかけとなりました。研究を始めたばかりのときは、あまりにも漠然としたテーマであるために、何から手を付けたらいいのか迷ったこともありましたが、歌わない子どもの存在の確証を得、次第に歌わない原因となる要素がはっきりしてきたときは、本当にうれしくなりました。歌うという行為の原点に戻り、自分なりに追求していく楽しさも加え、ますます歌うことが好きになりました。

調査においては、富沢小学校の森定先生、大口小学校の岩戸先生、緑ヶ丘小学校の近都先生、鳩里小学校の中村先生、そして、多くの児童の皆さんにご協力頂き、ありがとうございました。また、多くのご意見とご助言を頂きました同ゼミの吉田先生、ならびに、多くの友人に感謝いたします。

最後になりましたが、本研究に終始惜しみないご指導と激励をくださいました鈴木寛先生に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

平成5年1月20日池田干代